

---

# この大地の向こうへ

未摘花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

この大地の向こうへ

### 【Nコード】

N9048X

### 【作者名】

末摘花

### 【あらすじ】

かつて戦場で半身を失い、異なるものをその身の内に宿すことによつて蘇生した少年は天剣授受者によつてグレンダンへと導かれ、そこで彼はある使命を与えられる。

## 出発（前書き）

レイフォン視点から始まりますが、次話からはオリ主ね視点に切り替わりますのでご理解を。

ちゃんと書くのはこの作品が初めてになりますので、何かあったら未熟な未摘花にグサグサ言って下さい！

## 出発

早朝の停留所は閑散としていた。まだ眠りの覚めない都市の中は人もまばらで、すれ違う人と言えば朝の散歩を楽しむ人か、何か商売を営む人が準備に追われ、せわしなく働いているぐらいで、普段とはまた違った趣を醸し出している。

少し先の待合所には幾人かの人がいるが、そこに会話はなく。静かに出発の時を待っているだけだった。

都市間放浪バス。

広い大地を自由に歩き回るレギオス間を移動する唯一の手段だ。

当然、そこにいる人たちも都市を移動する事を目的とした人たちであり、今日このグレンダンを離れる僕の目的地もまた、この停留所だった。

「レيفون。」

一段高くなった停留所の階段に、足をかけたその時、少し後ろを声もなく付いてきていたリーリンが口を開いた。

「…僕は、行くよ。」

一度開いた口をまた閉じ、言い掛けた言葉を躊躇うようにこちらを見やるリーリンに答えを返す。

「出発はやめないし、許されることでもない。もう決まったことな

んだ。僕がそれを望もうと、リーリンが望もうと、例え誰である  
うとも、覆すことはできない。」

反論をさせないように、少し強めの口調で言い切る。

少し俯き、目を赤らめるリーリンの唇は震えていて、言葉を探すよ  
うに開閉していた。

結局、この場で交わす言葉に意味など無いのだ。都市全体の意志を  
覆すことなどできようはずもないのだから。ましてやそこに、本人  
の意思が無いのであればなおさらである。

いや、仮にそれを覆すようなことが起こったとしたら、その時こそ  
本人の意思なんて関係ないのかもしれないけど。

そんなことを考えている僕の気持ちも、余裕なんて欠片もなく「そ  
れじゃあ」なんて気の利かない別れを告げて歩き出そうとした時、  
僕はようやく停留所で所在なさげに視線をさまよわせる彼女の存在  
に気づいた。

「クラリーベル？」

グレンダン三王家の一角、ロンスマイア家が寵児。クラリーベル・  
ロンスマイアがそこにいた。

「おはようございます、レイフォンと、それにリーリンさん。」

「え？うん…え？あ、はい！おはようございます…！」

突然の来訪に反応の遅れたリーリンは、慌てて目を拭い、勢いよく

頭を下げる。

「そんなに畏まらないで、知らない仲でもないんだから。」

「あ…はい。じゃなくて、うん。」

「クラリーベルは、なんでここに？」

会うのも何回目かになるのに未だに慣れず、いつも通りのやり取りをする二人を見て、揺らいでいた感情も幾らか落ち着きを取り戻し、彼女に訪ねてみた。

放浪バスの停留所など、王族である彼女がくる場所ではないだろう。

「レイフォンの見送りが一つと、あと…リンを見ませんでしたか？」  
「辺りを見回しながらそう言うクラリーベルに、ようやく合点がいった。」

「リンは見てないけど…ここに来るってことは許可もらえたんだ。喜んでた？」

リン・テイルヴィング。彼は僕たちの共通の友人であり、出身的には所詮一般市民にすぎない僕たちとクラリーベルの接点でもある。数年前に移住してきて以来、三王家で馬車馬のように働かされてきた彼は、今回僕が行くことになる学園都市ツエルニに行くことを強く希望していたのだ。

「どうやらその許可が下りたらしい。」

「いえ、一度出そうになった許可は師匠と父様に言って握りつぶしてもらったんですけど、その際に隙を突かれて逃げられまして。」

「ああ……」

やっぱり無理だったんだ……。

「目的地はここしか有り得ないので来たのですが……見える場所にはいないようですね。」

そう言って乗り込み口の前に位置どり、辺りを警戒し始めるクラリール。

「バスの中とか、それでないなら別の目的があるんじゃないかな。」

えーと……ほら、買い物とかさ？」

バスは停車している間は停留所から延びたアームで宙吊りになっており、移動し続ける都市の外縁にぶつかり続けるため揺れの激しく、言ってはみたものの中にいる可能性は限りなく低い。（それゆえに裏をかいて中にいるという可能性は否定できないが）

一人で行くことになっていたツエルニに友人が付いて来てくれるならそっちの方が安心である。故に、別の目的とか思ってもないことを言っただけで浅知恵を働かせてみたのだが。

「バスの中は先ほど確認しましたが居ませんでした。待合所も同様ですが、まだ殺到して死角に潜んでいる可能性がありますし。それだけでなくも出発までは油断できません。」

当然通じなかった。

「……なんていうか、さすが。」

「いえいえ、あれのサボリを阻止するのは私の役目ですから。」

「絶対に逃がしません」といつて死角の調整をしつつ警戒を強めるクラリーベルにリーリンは乾いた笑いだけが漏れる。

見ようによっては変質者とも取られかねない警戒のしように、リーリンも少々引いているようだ。

雑談を遮るようにかん高い笛の音が響く。発車時刻が迫っているらしい。

待合所にいた人たちなど、近くに疎らにいた人がぞろぞろと群れてバスに乗り込んでいき、その時もクラリーベルが目を光らせている。

その列に並ぼうとして、ふと後ろを振り返る。

リーリンと視線が合い。一瞬の沈黙のあと、何かを言おうと思っ  
て口を開いたが、言葉にならずに閉口してしまう。

すると、そんな僕のさまが可笑しかったのか、リーリンはクスリと笑った。

「行ってらっしゃい。」

その言葉だけを残して、リーリンは後ろを向く。

駆けていく後ろ姿を最後まで見ることなく、踵を返しバスに乗り込む。

都市の地面とは違いバスの床は宙に揺れていて、その揺れがいよいよグレンダンから旅立つことを自覚させたが、リーリンの言葉が背中を押してくれたような気がした。

荷台に荷物を預け、通路の奥の席に座る。

一度強い揺れが起こり、窓から見えるグレンダンは少しずつ距離をあけていく。

ツエルニに着いたら手紙を書こう。僕は文才がないから、文面だけでも考えておこう。伝えたい言葉は、山ほどあるのだから。

「お別れは済みましたか？」

肘掛けに頬杖をつき窓の景色を眺めていると、横から声をかけられた。

横を見れば、まだ揺れも強いというのに放浪バスの乗務員の人通路に立っていた。

「隣、いいですか？」

「え、はい……」

僕が返事をするとはほぼ同時に席に座り（返事を聞く前に座る動作には入っていた）、「ふう」と息を吐く。

見た感じではかなり若い。乗務員の平均年齢は知らないが、多く見積もっても僕より少し上ぐらいだろう。

髪は首もと位までの灰色に中性的な顔、瞳の色はよく言えば珍しく（素直に言えば奇妙）、銀と金で左右で違っている。

「って言うか、リン!？」

「ああ、ようやく気付いたか、おはよう。許可は取れなかったけど、何とかなったぞ。」

「知ってる、じゃなくて…!」

窓を見ればグレンダンはすでに遠く向こうにある。

「まったくクラリーベルも執念深い、もう願書は出してるし試験も通ってるってのに。まあさすがに乗務員までは調べないとふんだんだけど。」

「単純だな」などと言いながら。カバンから総菜パンを取り出し包装を破く。どうやらこれから朝食らしい。

「…その服は？」

リンが今現在着ている服は間違いなく乗務員の制服である。その手の服は防犯対策などの理由で入手など不可能なはずだ。二つに割ったパンの片方を口に放り込んだリンはもぐもぐと咀嚼しながら親指と人差し指で小さな輪を作る。金の力で何とかしたらしい。

週七日の勤務態勢で三王家にこき使われているリンは給料を使う暇もなく、結構な貯えがあるのだ。

「大丈夫なのかな……」

服装もそうだけど、黙って出てきたこととかも厄介事の匂いがする。そんな不安に気をもまれていると、ようやくパンを飲み込んだリンが口を開く。

「大丈夫だろ、別に悪いことをしてるわけじゃないし。それに都市の外まで追ってこないさ……多分。」

「曖昧な言い方だ!?!」

クラリーベルとか怪しいでしょ。行動力だけは凄いし。

「何はともあれ……」

リンは柔らかく笑い、言う。

「これからもよろしく。」

リンのその言葉に、僕は顔がにやけるのを止められなかった。リンがツエルニ行きを望んでいたのは勿論だが、希望していたのは僕も同じなのだ。

だから僕も、笑って言葉を返す。

「こちらこそ、よろしく。」

## 入学騒動 その1 (前書き)

特定の視点を意識するのは難しいですね。  
流れは頭に入ってるのに妙に手こずりました…。

これから上達していけば、と思う次第です。

## 入学騒動 その1

騒動は唐突に起こった。

グレンダンを出発したあの日から一ヶ月かけて、ここ『学園都市ツエルニ』に到着したその翌日。

荷解きもそこそこに、着慣れない制服に身を包み、いざ入学式へと参じようとした時のことだった。

「てめえん所との戦争でいたい何人の死人が出たと思ってるんだ！」

「戦争でのことだろ？都市の戦争で人が死ぬのは当たり前だろうが。そんなことも承知してないのかよ。」

「平均の三倍以上の人数だぞ！そのせいでミウゼは今孤児であふれかえってるんだ！限度つてものを知らないのか！」

「バカ正直に突撃しかなないからそうなったんだだろうが。芸学都市だか知らないが、弱い奴が下手に抵抗するから無駄死にが増えるんだよ。」

「武芸者の誇りも持たない蛮族がっ！」

「……っわぁ」

講堂前の人混みから聞こえてきた怒声にレイフォンが顔をしかめる。

「決して都市間の争いを学内に持ち込まないこと。とか入学要項に書いてなかったか？」

「あつたよ、確かに。」

レイフォンが手帳を開き（しっかり携帯していたことに正直驚いた）確認しながら答える。

騒ぎの中心では二人の武芸者が睨み合っていて、ピンと張った空気が辺りを包んでいる。

片方はすでに半身の態勢をとっており、片手が腰に回されている。ここからじゃ確信まではいかないが、恐らく錬金鋼を抜くつもりだろう。

辺りにいた一般生徒も殆どが雰囲気飲まれて動けていない。

「入学要項を破って錬金鋼の無許可携帯に学内での私闘、それも他生徒を巻き込んでなんて。嚴重注意じゃすまないだろうに。」

彼らはここでの生活を早くも棒に振るらしい。

「行こう、レイフォン。あの程度の未熟者、上級生がすぐに取り押さえて終わりだろうさ。」

その声をかけて、先ほどまでそこに居たはずのレイフォンがいなくなっていることに気付いたのと。騒ぎを起こした武芸者が錬金鋼の

起動言語を叫んだのは同時だった。

レイフオンは恐らく反射的に対応しやすい位置に移動したのだろう。それにしても、移動した気配すら感じなかった。あのやろつ、殺剄してやがる。

腰だめに構えられた錬金鋼が抜かれたその過程において形状を変化させる。

数瞬前までは棒菓子のような手のひら大の直方体だったそれは、起動言語によって目を覚ました。

両手に持つてなお余る細長い、しかし頑強そうな柄。そこから長く連なる鎖の先には重厚な分銅が備えられている。

振り抜かれた動作で発生した遠心力は衝剄によって鎖を誘導することとでその威力を増加され、先端にある分銅を標的へと殺剄させる。

弾丸のような速度で迫る凶器は一般人であれば確実に殺す威力を持っているが、活剄によって強化された武芸者の視力と反応速度は容易にその脅威を回避させた。

「おせえんだよっ!」

内力系活剄の変化、旋剄。

脚部に集中させた活剄によって脚力を増強し、一足で離脱する。

「つうらあぁ!」

標的を失った錬金鋼がうねるように蛇を思わせる動きで追尾する。

空中に飛んだ生徒は建物を足場にさらに跳躍し回避するが、それも一時凌ぎに過ぎない。

中空から着地したときにはすでに数メートルの距離まで迫っていた。回避してもギリ貧、ここまで迫られたら迎撃も間に合わない。

「クソがつ。」

旋廻で脚力を増強し、攻撃の手を逃れるために人混みに逃げようと、意識を失った。

「ああ……やっちゃったよ……」  
辺りは水を打ったように静まり返っていた。追いつがる分銅から逃れようと人混みに飛んだ生徒は今地に伏して、追尾していた分銅はひび割れ、砕け散っている。

錬金鋼を振るっていた生徒も放心して立ち尽くしており、熱を帯びていた観衆も今は遠巻きに見ているだけ。

つまり、今やこの騒ぎの中心人物の一角となってしまうた愛すべき我が友人、レイフォン・アルセイフはこれでもかと言うほどに目立っているわけで。

今更に騒ぎを聞きつけてきたのだらう、人混みを分け入って駆けつけた上級生と思しき人たちは私闘を演じていた二人生徒の捕縛を命

じたあと、レイフォンと俺の双方を視界に入れるように見渡し。

「君たちも、悪いけどちょっと一緒に来てくれるかな。」

初日から偉い人（実際にそうなのかは知らないが、雰囲気が違う）から呼び出しを食らってしまったのだった。

「……………え？」

主犯であるレイフォンは未だに呆けていたが。

## 入学騒動 その1（後書き）

さて、ようやくですね…。

文字数少ない！

なんだか自分のものぐさが露呈したみたいな感じになってる。

でも、この二人の私闘を長々と描写したところで「誰得だよ!？」  
なんてお言葉が来そうですね。

要精進ですね。

それにしても、こんなまだ始まってもないような作品をお気に入りに入れて下さっている方が居るそうで。  
本当に感激です。

## 入学騒動 その2 (前書き)

ストーリーはたいして進みません。

でもこのままカリアンの話し合い(笑)まで続けちゃうと一気に話ごとの文字数が変わりすぎてしまうのでいったんここで切ります

## 入学騒動 その2

「右手に見えるのが研究棟、その向こうには練武館があるんだが…  
ふむ、ここからじゃ良く見えないか。」

「研究棟、ですか？」

「実験などの大掛かりな設備や場所を要するときには使用される建物だ。主に錬金科や農業科、一般教養科の生徒が利用しているな。武芸関係だと錬金鋼の調整や開発が主な使用目的になる。」

そいつって指で示された方を見れば、無骨なコンクリート製の建物が目に入った。

騒ぎを鎮圧したすぐ後のこと。

俺とレイフォンは並んで生徒会棟の廊下を歩いていった。

俺たちが歩く数メートル先には、見るものに硬質なイメージを抱かせる引き締まった長身に彫りの深い顔をした質実剛健という言葉成形にしたような上級生（なんでも武芸科の偉い人らしい）が先行していて、現在俺たちは目的地も知らないまま、のこのことその後について行っているのだった。

今は会話代わりに、見える範囲で学校施設の説明がされている。

隣を歩くレイフォンはというと、晩の献立でも考えているのだろう、窓の外をぼうつと眺めていた。

「ついでに、ここだ。」

案内をしていた上級生がひとつの扉の前で立ち止まり、ノックをした後こちらを一瞥する。

「入れ。」短く言い切った先輩が入室を促すその扉は控えめな装飾を施された木製の扉で、掛札には『生徒会長室』と書かれている。

学園都市に区分される都市はその人口の全てが学生によって占められており、学生による自治が行われている。

生徒会長という存在は、その学生の長であり、つまり、ツエル二の全権を一手に集める都市の最高権力者ということだ。

生徒会棟のずいぶん奥まで来たと思っていただけ、もしかして位には考えていたけど。まさかその予想が当たるとは思ってたなかった。

しかしそうでないなら誰に会うのかと言われると何も考えつかないから（少なくとも俺はツエル二において生徒会以外の自治組織を知らない）案外妥当なのかもしれないが。

ともあれ、これから会うのは一つの都市をまとめ上げる人物である。流石に『あの』女王は例外としても、ただの凡夫に務まる役職ではないのだ。どのような傑物が出てきても不思議ではない。

緊張に動悸が早まるのを感じる。背後ではレイフォンも表情を硬くしていた。汗ばむ手を白い制服の裾で拭いドアノブに手をかけた所で、「待て。」とドア脇に控えていた先輩から声をかけられた。

俺とレイフォンと、揃って先輩を見上げる視線から意図を察したの

だろう。先輩は横目でレイフォンを見る。

「入るのは一般科のお前だけで、武芸科の君は帰っていいそうさ。」  
「じゃあ何で連れてきたんだよ！とは流石に言わず、「そ、そうですか。わかりました。」と無難な対応を返す。

一歩引けば、扉の前にはレイフォンだけが残されていて、救いを求めるようにこちらを見ているが当然差し伸べる手などありはしないわけ。

「まあ、頑張れ。」

「うっ…何で僕だけなんだ。」

自分でも解るくらいに乾いた笑みとともに送り出してやるとレイフォンはこそそと扉の奥に消えていった。

さて、レイフォンがいなくなって残ったのは俺と、未だに名前も知らない先輩だけだ。

「どれくらいかかるでしょうか？」

いささか言葉の足りない質問だと言ってから気付いたが、先輩はちやんと意味をくみ取ってくれた。

「たいしてかからないさ。さっきの事件について、二、三確認があるだけだから。長くても、一時間もかからないだろう。」

なるほど、だったら先に帰らずに待っててやっても良いか。このまま残してさっさと帰るのは良心が痛むし、それに、確かここまでの

道のりに売店とベンチがあったはずだ。そこで一休みついでに時間を潰せばいい。

レイフォンがいなくなつてからこの場にいるのは俺と、未だに名前も知らない先輩だけだった。

会つたばかりで会話の種などあるはずもなく。だから気まずくなる前に立ち去ろうと思つたところで、先輩が口を開いた。

「君。」

「なんでしよう?」

こちらを見る先輩の表情は会つたときから変わらない仏頂面で、つまりは無表情と言い換えてもいいのだが、その声色はなんだか注意するような棘があつた。

なんだろう? 特に何もしていないはずだけど。それとも、知らずの内に何か怒らせるようなことを言つてしまつたのだろうか。

少々の不安が頭をよぎつたが、結果から言つとそれは全くの杞憂だった。

「女子の制服はどうした?」

「……………」

「激しく動く武芸科の女子生徒がスカートを嫌つのは、まあ解らないでもないが、原則として女子が男子の制服を着用することは許されてない。」

「……………」

「野戦服や運動着などは用意されているはずだ。試合中や訓練中はそれらの着用が許されている、そもそも用意された物ではない制服を着ることは身分の詐称にあたり校則で禁止されている。あまり言いたくはないが、普通なら罰則を言い渡すところだ。」

「……………」

「新入生ということもあるし、今回は見なかつたことにするが。今度からはちゃんと用意された制服を着るように。」

「……………」

「む？聞いているのか？返事をしろ。」

「俺は男です。」

「…………ぬ？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9048x/>

---

この大地の向こうへ

2011年11月13日11時49分発行